野川　生命あふれる川に

河原版（かわらばん）

第5号

野川で遊ぶ
まちづくりの会
尾辻　03-3326-8285
依田　0424-80-8861
内藤　0424-89-9351

心のものさし

野川で遊ぶまちづくりの会
代表　尾辻　義和

人間は、いつの頃からか自分の欲するもの、例えば食物などを手に入れるためにお金を作り出した。お金そのものに本来その価値はないけれど、約束事として、価値があるということをそれを使うものが互いに認識することで、お金社会が成立している。現在では、さらに通信網を使ってお金の授受が行われたこととして、実際にはお金そのものが授受されないのに、物だけが動いている。いま、お金が一人歩きをはじめている。何から何までお金で済む世の中になってしまった。土地さえもその例外ではない。1坪何百万円という土地もある。地方の人が都会に押し寄せ、都会の農家は何もしないで資産家になってしまい、税金や巨額の相続税で代々受け継がれてきた土地を手放さなければならなくなってしまった。が一方で、家一件分の土地を売ると普通のサラリーマンの生涯所得よりも多いお金が手にはいるようにもなった。不動産屋は、銀行からお金を借りて土地を買い、転売してあぶく銭を手にした。額に汗しないで巨額のお金を手にいれた人は、欲しいものを何でも買った。

地球上には100以上の国家があるが、その優劣をGNP（国民総生産）で計ることが多い。

日本はGNPで世界何位だといわれる。戦後GNPが飛躍的に伸びて日本は経済大国の仲間入りをした。日本の国民は勤勉に働いた。戦後の貧しい生活から、洗濯機や冷蔵庫、テレビのある豊かな生活？をめざして一生懸命に働いた。しかし、物質的には足りるようになっているが、心の充足はあるのだろうか。

調布に住み続けたいと考えている人の30％の人がその理由に自然環境の良さをあげている。（平成4年度調布市市民意識調査より）春になるとオオイヌノフグリやヒメオドリコソウがかわいい花を咲かせて、私たちを楽しませてくれる。この何にも代え難い環境を失うことはいったいどのくらいのお金を失うことに等しいのだろうか。と考えてしまう自分がいやになる。お金以外のものさしはこの世にはないのか。心の充足をはかるものさしはないのだろうか。

オイカワ

夏の暑いさかり、陽焼けした半ズボン姿の子供たちが手網を構え水の中をうかがっていました。膝まで水につかり、身をかがめて一点を凝視しています。その姿はさながら獲物をねらう鷹の眼を連想させました。

彼らがねらっていたのは、野川一の俊足（俊泳？）オイカワでした。関東ではヤマベとも呼ばれていますが、水に冷たい渓流にすむヤマメと名前が似ていることから、しばしば間違えられます。（北海道や東北の一部ではヤマメをヤマベと呼んでいるから、なおヤヤコしい！）関西のほうでは単純にハエと呼ばれています。

よく見ると、体がメタリックな緑色に光り（緑釉の釉薬のように）、オスの尻ヒレはレースのような大きさと派手さを持っています。

大昔から多摩川にいたかどうかは定かではありませんが、浅く開けた瀬を好むことから、近年、多摩川や野川で数多く見ることができます。もっとも、河川改修でどこもかしこも浅く開けた瀬ばかりになってしまいましたが‥

夏が近づいてくると、オスの鼻先に無数の白いにきびができます。また、橋の上からはペアの産卵の様子を見ることができます。以前、水槽内に川砂をひいて環境を整えておいたら、８月になって濾過（ろか）装置の中に無数の稚魚が泳いでいて大慌てになったことがあります。

濾過装置のある水槽なら飼育も可能ですが、遊泳力が強いので小さい水槽ではやめたほうがいいでしょう。採集のときは、網をふるうのではなく、石の下に隠れたら静かに手掴みしてやります。　（Ｎ）

露と水滴

＜その一＞

世の中、何でもそうなんだけれど、「きれい」とか「きたない」という言葉の基準は、かなりその人の主観で決まってしまうように思う。いったいどの点を境にして「きれい」「きたない」が分かれてくるのか明確に説明できる人なんか誰もいない。

水の汚れもまったく同じで、一本の水道管から流れているのに、毎日飲む水も手を洗う水も、トイレで流す水もすべて別々でなければ気持ちが悪い。あるいは理科の実験で使う蒸留水をガブガブと飲んで「うまいんだな、コレが！」とやれば、誰だって、精神的な屈折を同情してくれるだろう。江戸川や淀川のように、下水の放流口のすぐ下流に水道の取り入れ口があっても、蛇口から出てくる水道であるというだけでみんなはガマンしてしまう。

水の「きれいさ」を表す尺度でＢＯＤというのがあるけれど、ＢＯＤゼロの水の中で魚を飼っていると大概は長生きしない。『水清くして魚棲まず』の原則は古今東西不滅である。

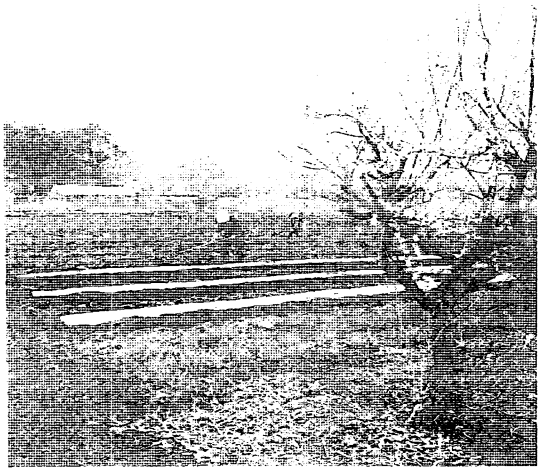
僕たちが「汚い」といっている根源が実は生物界のバランスにとって最も重要であり、「きれい」と思っている裏には単に数字のランクづけや外見からくる安心感に過ぎない。そんなヘソ曲がりな発想から、下水処理の問題を考えてみたい。

頑張れ都市農業（4）

依田　輝男

昨年、三鷹市で開催された「都市市民の立場で考える『今なぜ農なのか』」という連続講座に参加しました。これは、”みたか市民ネットワーク”が主催して農協青年部と市役所の若手職員、都市住民の方々が一緒になって都市農業について考えてみようとする試みでした。第４回目の講座は、実際の農家を見学してみようという企画でした。

三鷹市中原の星野さんのお宅は広大な農地と庭の大木、農具の入った納屋と、それは懐かしい田舎のにおいがしました。ビニールハウス内の実験農場とも云えるスペースは、品種改良などのさまざまな試みがされていて、本当に農業を愛しているのだという気持ちがひしひしと伝わってきました。



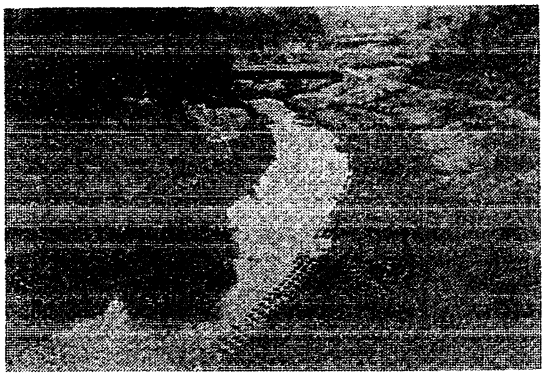
星野さんの畑のナスは東京一だということでしたが、キュウリやトマトもそれは見事なものでした。大きなたらいにいっぱい浮かんでいたトマトをみんなでごちそうになりました。見学の終わりに分けていただいた一本のナスの苗で、ベランダ栽培を始めました。毎朝水をやるのが楽しみでした。しかし、ナスが実をつけて１ヶ月位した頃から次第に元気がなくなってきました。ある日曜日、よくみるとナスの花のまわりや葉の裏側にビッシリとアブラ虫がついていました。とても手でとりきれるような状態ではなく、しかたなく、近くの農家で農薬を少し分けてもらってかけました。日頃、無農薬、有機農業をなどと云っている自分がこの有様でした。

多くの都市住民は自分の周囲に農地が残って欲しいと云います。安くて安全でおいしい作物には想像以上の手間がかかっています。都市住民が農的環境を望むのであれば、そのコストを負担する必要があるでしょう。緑と土と水を守ってきた農業の価値に思いをよせて、もっと農業のことを実地で知る必要があります。１本のナスを育てて、そんなことを考えました。

「野川シンポジウム」で思ったこと

三多摩問題調査研究会　鈴木聖子

それは、9月5日（1992年）の昼下がり、調布市グリーンホール・小ホールで行われた。行政と市民の代表そして司会が真ん中で半円卓を囲み、それを見守る人々はバウムクーヘンのように幾重にも重なり、「調布の地下水」麦茶＆小金井「ポルシェ」特製「野川サブレー」を頬張りながら固唾を飲む。ちなみに「シンポジウム」の語源は古代ギリシャの対話・座談を伴った酒宴"symposion"であり、円卓を囲んでいたらしい。このシンポは酒ぬきであるが（麦はお茶だけ）まさしくその通り。元祖シンポジウムの心を踏襲したものと言えよう。すごいぞっ！



水辺らしさを残す野川

まずは、野川の宝物、鍔山さんの素敵なスライドで野川の抱える問題を再確認した。次は、東京都職員（都市計画局・都市建設局・環境保全局・下水道局）と市民代表によるパネルディスカッション。都職員の中には初めて市民にさらされてよほど怖かったらしく、震えていた人もいたそうだ。別に捕って食ったりはしないから、市民との対話に慣れて、市民参加型行政へと脱皮していってほしいものだ。と同時に、市民も行政の論理、やり方を知ったら（認めるのでない）行政・市民のすれ違いの原因が見えてくるかもしれない。都職員のひとりに、ふるさとで流行った疫病に多くの人命が奪われた体験から、人々を救うため衛生工学を専攻して行政マンになった、という人がいた。行政に携わる人間も最初は高い志しに胸躍らせ、「ひと」に想いを馳せていたのではないのか。どこから市民のサービス業であるはずの行政が「ひと」を忘れ、業務の遂行にのみ囚われていくのだろう。もともとの想いは行政と市民でそんなに違うのだろうか。ふと考えてしまった土曜の昼下がりであった。

三多摩自然環境センターがスタート

金子　博

《現在　会員募集中》

多摩地区の環境問題に関心のある市民が、同じ課題について話合いや情報の交流ができる場所の必要性が望まれている。河川改修を例にとっても、野川をはじめ落合川、平井川、浅川などで市民が行政に対して異論を唱えている。これら水系の異なる市民が互いに連帯しながら、共通の問題に取り組むことも必要な場面も出てくる。容易に連帯できうる態勢づくりを考えた場合、情報の共有化が第一に考えられる。センターの当面の活動は、情報交流を支援するニュースレターの編集・発行となる。ここには、グループや市民から寄せられた情報が載せられる。

センターの設立にあたっていくつかの整理を世話人会の中でおこなった。①事務局の運営主体は市民団体・個人であり、その財源は会費（年間１口3,000円）やカンパによる。②事務局は、情報センター的な役割として位置づける。③ＴＡＭＡらいふ21事業とのかかわりは、各自の判断を尊重する。

運営は月一度の編集作業を兼ねた会議（会員の自由参加による）が中心となっている。代表には横山十四男（みんなの土手の会）が選任されている。特徴的なのは事務局業務の一部を委託（小金井市本町の編集会社・アトリエネット）していることである。会員の市民団体・個人は日常の活動に追われ、新たな事務作業は大変な重荷になってしまう。そこで、会費から実費程度を支払っている。

将来、情報の共有をもとに、政策の立案能力の向上までも市民自らが目指していければと思う。（会員募集中－問い合わせはアトリエネットまで　TEL 0423-84-8951）

三多摩自然環境センター

主な取り決め事項・規約はありません（運動体ではないため）。下記は今までの確認事項。

代表　横山　十四男（東京家政大学教授・みんなの土手の会）
世話人　若干名
会費　年3000円（１口）
入会資格　個人・自然保護団体いずれも可
（会報ＮＥＷＳ第３号より）

入会申込受付中！

郵便振替により年会費を納めてください。入金が確認されますと正式入会となります。

なお、裏面には申込者名、連絡先住所・電話番号、年会費口数（何口でも可）をご記入下さい。入会者名はＮＥＷＳで紹介します。

※郵便振替口座
「東京５－５６４１４０
三多摩自然環境センター」
（会報ＮＥＷＳ第３号より）

トンボの旅

上村　佳孝

九月ごろから、野川周辺でもたくさんのアカトンボを見かけるようになる。十月の運動会の季節には、グランドの上などでも郡飛する姿が観察できます。このアカトンボの９０％以上はアキアカネです。このトンボは、６月ごろに平野の水田などで羽化します。しかし、その時期にアキアカネを見かけることはあまりありません。なぜなら、このトンボは羽化後ただちに山地へ移動してしまうからです。僕は、夏の立山の高原（標高2450ｍ）でたくさんのアキアカネを見たことがありますが、このような大旅行をする理由は気温のためだと言われています。その証拠に、東北地方などではもっと低い場所でも観察することができます。

秋になり涼しくなってくると、アキアカネは平野に再来し、稲刈り後の水田の泥などに産卵するのです。

このように夏に高い山に移動するトンボには、他にミヤマサナエが知られていますが、珍しい種類で調布狛江辺りには生息していないものと思われます。

トンボのもう一つの旅行の形式として、北上というものがあります。最も普通に見られるのはウスバキトンボの北上です。調布狛江辺りには、七月ごろより出現し十月頃まで見られますが、幼虫は関東では越冬できないため、毎年南方で羽化した個体が北上してくるのです。しかし、なんでこのような無駄（そうみえる）な旅行をするのかは分かっていません。

北上してくるトンボには、他にオオギンヤンマやハネビロトンボがいますが、これらはごく稀に飛来するだけです。なお、ハネビロトンボの方は以前に狛江で採集されました。

トンボの旅行は、まだまだ分からないことの多い興味深い問題です。

自由研究発表会

上ノ原小学校４年　清水　路子

私は、夏休みの自由研究で、炭焼きを体験しました。炭焼きを、やろうと思ったのは、７月３１日の新聞を見て、きょう味をもったからです。

その自由研究は、私一人だったので、よかったと思い、発表をしました。発表をする前、きんちょうしました。でも発表すると、いがいとうまくいきました。でも自分の考えを発表していなっかたので、ちょっと、だめだなぁと思いました。

みんなの発表もいろいろきいてみたけど、私もやってみたい、研究や、工作がいっぱいありました。みんな、とてもじょうずだったのですごいなぁと思いました。

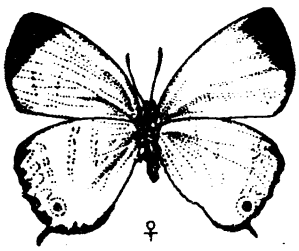
みんなは、図書かんに行ったりしたりしてしらべていて、勉強家だなぁと思いました。みんな、それぞれちがっておもしろかったです。工作などでは、いろいろくふうしてあって、すごいと思いました。あろゆるものを利用してとても感心しました。

ハケとわき水と蝶と

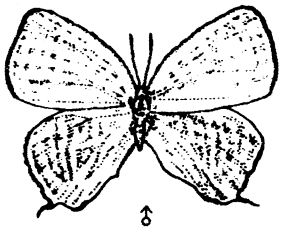
本木　伸太郎（カレー屋アーザンの御主人）

ハケと呼ばれる国分寺崖線沿いの林や湿地などは、身近にある今では少なくなってしまった蝶たちの宝庫です。崖の上の部分や斜面を見てみましょう。昔薪や堆肥用の落葉を採るために植えられたコナラやクヌギがあります。これらを食草とするアカシジミやウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミなどが可れんで愛くるしいオレンジ色や濃い光たくのある緑色の花びらのように“つゆ”の頃の夕方梢の上をキラキラと飛びまわります。当時、40年位前迄ですが、木や枝が定期的に切られていたため切ったあと新芽がたくさん出てきて、これらの蝶がたくさん住みついていました。アラカシというドングリがなる木には、陽に当るとキラッと紫色に光るムラサキシジミがいます。また、マッチ棒の頭ほどの赤い甘い実のなるエノキは、四種の蝶の食事場です。国蝶のオオムラサキは殿さまのよう。ヒオドシ蝶は荒武者、ゴマダラ蝶は初陣の若武者、チラチラと飛んではすぐ姿がみえなくなるテング蝶は忍者といったところでしょうか。みな力強い感じの蝶たちです。サンショやコクサギなどミカン類は、オオガアゲハ、カラスアゲハ、クロアゲハ、アゲハなどが食べます。幼虫が笹などにつくアブラムシを食べるチョッと変ったゴイシジミも見られるかもしれません。

図17　ウラナミアカシジミ



♀



♂

♀裏

保育社『標準原色図鑑全集1 蝶・蛾』（白水隆・黒子浩著）より。

さて、林の縁にはつる草が生えていますね。藤やくずの花のつぼみを食べるウラギンシジミは、銀色の折り紙で作った飛行機がすばらしいスピードでドッグファイトをしているようで、はじめて目にした時は、ドキンとするはずです。小粒のサファイヤのようなルリシジミ、やはり藤などが食草。カナムグラを食べるキタテハは今でもたくさんいます。そして湧水の近くや流れの縁にハンノ木があればエメラルド色のミドリシジミがいます。また、トゲのあるイボタの木は、ウラゴマダラシジミ専用、湿地にはえるセリとかミツバにはキアゲハ、スイバやギミギシにはベニシジミ、柳の類があればコムラサキがいます。タネツケバナは妖精のように清楚なツマキ蝶の食べ物で春の連休頃だけ姿を現わします。すでにかなり少なくなってしまった種類もかなりあります。皆さんの身近なところの崖線沿いにこんな木や湧水湿地などがあれば、まだまだ美しい蝶を見るチャンスがあります。草刈りや植樹の時には、蝶や虫の事なども思い出して下さい。

炭焼きキャンプ体験報告

大木　健次

１．キャンプデータ

日時	１９９２年１１月２７日、２８日
場所	深大寺南町　カニ山キャンプ場
主催	野川で遊ぶまちづくりの会
講師	広若氏（炭焼きの会）
参加人員	３５名（７家族）
参加費	１泊２０００円、当日１０００円

２．目的

会のメンバーを中心に炭焼きを体験し、習得する機会を持つ。

３．経過

２７日	9:00～10:00	炭材をカニ山ふもとより広場へ運ぶ。
	10:00～12:00	広若氏ほか２名の指導を受け、伏せ焼き用のカマ掘り及び炭材の配置、覆いをする。ドラム缶ガマの設置。火付けをし、火勢を強める為の送風をうちわで行う。
	12:00～15:00	送風終了。カマの焚き口を縮少。
	16:00～18:00	夕食準備。テント設営。防雨用天幕設営。
	18:00～23:00	夕食、懇談。カマを密封。
	23:00～	１時間毎にカマを点検。
２８日	9:00～12:00	朝食。天幕撤去。
	12:00～15:00	昼食。テント撤去。
	15:00～16:00	炭出し。広若氏による解説。解散。

４．反省

・内々での開催とはいえ、参加人員が少なく、労力的にも必要最低限ギリギリ（講師３名を含めて）の上、収支が赤字になった。

・焼き上がった炭の質が思ったよりも軽かった。（今回の時間設定としてはベストの質なのかもしれないが）

・準備から、当日の運営、資材調達、終了後の運搬まで代表に頼るところが大きすぎた。

・雨への対処も含めて無事に所定の目的を達せられた。

５．感想

広若氏が２７日10:00ＡＭ、、伏せ焼きガマに配置する炭材を手に思わず言った。「（何の開会宣言も挨拶もないまま）ダーっとやっちゃっていいんですか？」それほど、人出は足りなかったし、工程を時間通りこなすことにメンバーは追われていた。その時、外部からの参加者、女性２名。しかし終わってみれば、学術的、趣味的に炭焼きを楽しむぜいたくとは多少かけ離れていたものの、炭焼き（伏せ焼き）の全工程を目にし、体験し、一部記録することはできた。というか実情はキャンプ運営に必要な食事作り、テント設営から、季節がらたき火、防雨の為の設備、翌日の丸太運び（余った炭材用の丸太をキャンプ場のイスとして運び、埋めた。）まで、全メンバー体を動かすことに追われていたということ。

一段落し、たき火を囲んで夜の懇談に花が咲いた・・・。その頃は昼の疲れがドッと押し寄せて・・・。ただ、晩秋の山のキャンプというものは（しかも雨降りの中で）思いの外のもので、いい楽しみを覚えたと思った。寒い雨の降る土曜日なんてふつうならＴＶ見てゴロゴロするくらいなもの。一日分いつもより有意義な時間を過ごさせていただいた。講師、メンバーの皆さんに感謝したい。

炭焼き体験に参加して

折原　禎子

昨年の１１月、「炭焼き体験」に参加させてもらいました。今回の私の目的は、実は炭焼きはもち論ですが一泊のキャンプを子供に是非体験させたい、という事でした。ところが当日はあいにくの天候。一日目は私は都合で参加が遅れ、かけつけたのは夜半過ぎ、ますます雨足が激しくなる中、自然広場にボォッとけむる焚火のあかり。「あっ、お母さんだ！」と元気な子供の声が聞こえます。炭の窯入れ作業を終え、夕食をとりながらくつろいでいるところでした。子供にとって生まれて初めてのキャンプの夜、その上友達と一緒に夜通し過ごす楽しみは格別で、冷たい雨など関係ないといった様子です。（炭焼きの方は二の次に見えるけれども、まっいいか！）と私は空を見上げ、後髪ひかれる思いで広場をあとにしました。ところが一夜明けると朝方までの雨がうそのよう。朝もやの立ちこめる中、またやってきた私は木立に囲まれた広場のさわやかな美しさに感動しました。見渡すと木の葉をすっかり落とした雑木林が広がっています。でも話によるとここの木は伸びすぎていて枝うちしなければならない状態とのことでした。森を守るという事は、自然のままにほっておくのではなく、人の手をかす事によって木々だけでなく、その周辺の小さな草、花の生態が保たれることにもなるのです。そして切り落とされた枝も炭となりまた生き返る。自然の恵みに感謝し、自然と上手につき合っていく為に何か努力する事の大切さを感じました。美しい自然を子供たちへ残してあげる為にも。

初めは子供の経験にと思い参加した炭焼き体験でしたが、結局は又、子供を通し大人の私が色々学ばさせてもらったようです。関係者の皆様本当に有難うございました。

すみやきキャンプの思い出

滝坂小学校　３年　折原　貴道

ぼくはじっさいにすみをやいている所を見るのは、はじめてでした。キャンプ場についてから第一回目のすみやきキャンプでおつじくんが上村さんたちといっしょにたんけんに行ったという道をさんぽしました。それからおつじさとしくんとおつじくんのおにいちゃんと三人で折り紙をテントの中でしました。ぼくが「なんかテントの中で折るとうまく折れないなぁ」と言ったらさとしくんも「うん。」と言いました。夜、みんなでたき火をとりかこんでお肉やおでんを食べたことが一番楽しかったです。

つぎの朝、木のえだに、たき火の火をつけて火遊びをして遊んだこともたのしかったです。さいごにすみをみんなで見て、ふつうの木があんなに黒くなるなんて、すごいな、と思いました。すみを少しもらってから帰りました。

こんどもあったらまたさんかしてみたいです。

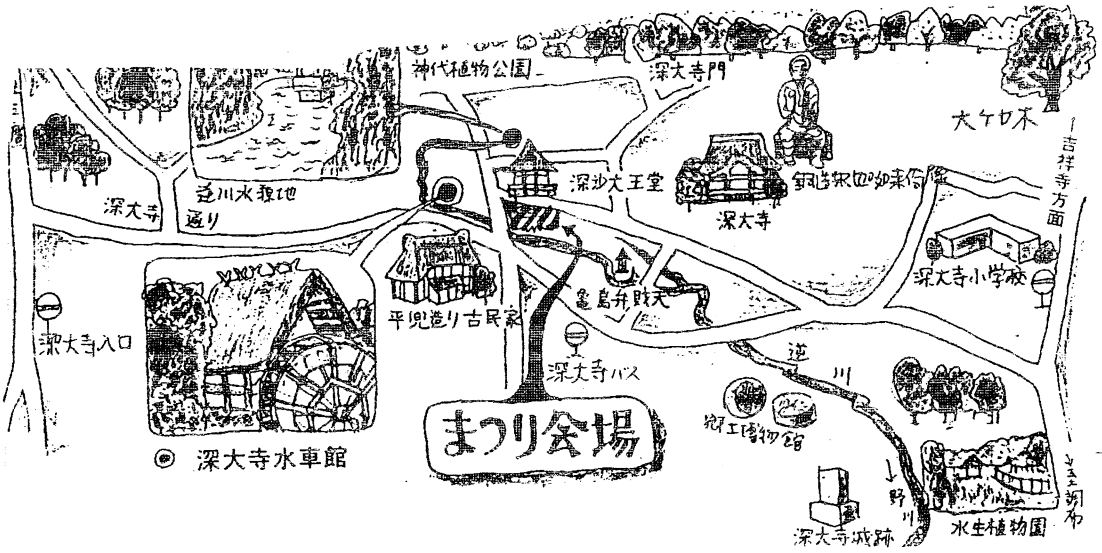
報告２．講演会「野川の復活と水循環」

講師　山道省三氏（とうきゅう環境浄化財団）

１１月２２日（日）に調布市福祉会館で写真コンテストの授賞式の後に行われました。山道先生は、川と人々のくらしの関わりについて、多くのスライドをまじえてわかりやすく話してくれました。スライドは外国のものもあり、それぞれの風土に応じて人々が川と共生する絵はとても印象的でした。現在も水路として利用されているイギリスの古い運河や水上生活者がいるアジアの川などです。

野川を見てみると、以前は農業用水として人々の生活に密着していたのが、その役割が薄れていくにしたがい、住民から離れていったようです。行政は治水といった視点で堤防をコンクリートで固めた時代から親水といった視点で川をいこいの場にしようとしています。しかし、氏は石で護岸し、コイがのさばる今の野川に疑問をていしています。ハード面の整備だけでなく、人々に親しまれるしかけといったソフトの必要性を説きます。人々に親しまれてきた川には、必ず「河童」などの伝説があるといいます。野川に新たな伝説をつくり、都市用水と人々との新しい関係を築いてほしいと言って講演は終了しました。

都市用水の新しい役割といったものは、行政が提示するのではなく、そこに生活する私たちが”こうあってほしい”と提案すべきだと思います。野川が多くの人々に愛されるために、”遊び”を１つのキーワードとして考えていきたいと思います。



「第６回 野川わき水まつり」報告

四方田　清

昨秋、野川流域の美しい自然を守るために野川のすばらしさやその源　となるわき水の大切さを紹介する「第６回野川わき水まつり」が実施されました。まつりは、①わき水イベント②野川の自然写真コンテスト③講演会からなります。私が参加したわき水イベントと講演会について報告します。

報告１．わき水イベント

１０月４日（日）に深大寺の敷地内で、わき水ウォークやわき水トークなどのイベントが行われました。ニジマス炭火焼きやわき水コーヒーなどわき水に関連する模擬店が出店し、多くの人でにぎわいました。わが会では新しくできた水車小屋で石臼によるソバ粉ひきを実演しました。イベントの中でもメインの出し物です。石臼でひいた粉は、ソバガキにして１個５０円で試食してもらいました。お年寄りは「昔はよく食べたもんだ」と懐かしがり、また若い人は「ソバガキって何？」と珍しいのか、粉をひくのが追いつかないほどの大盛況となりました。国内産ソバ１００％の粉と深大寺のわき水で作るのですからおいしいのは言うまでもありません。

大忙しで疲れましたが、ソバガキの味からこの”おいしさ”を提供してくれる自然環境を大切にしたいと感じた１日でした。

◆参考　ソバガキの作り方

①片手鍋に水を少しはり、沸騰させる。

②①の鍋にソバ粉を入れ、手早くはしでかきまぜる。

③水気をとばしたらできあがり。

④大根おろし、きざみネギ、おろしショウガなどの薬味としょうゆで食べると最高。

「遊ぶ会」活動メモ（1992年9月～1993年1月）

9月5日　「野川シンポジウム」に参加

私は残念ながら仕事で参加できなかったのですが、参加した何人かの方に話を聞いたところ、野川に寄せる市民の熱い想いが、都の担当課長さん達に一人の人間として伝わったらしく、シンポジウムの終りの挨拶の中でそれぞれが自分の住まいの近くの川を語ることから始めたそうです。例え結論めいたものはでなくても、続けてゆく価値のある大きな一歩だと思います。調布市においてもそうでありますように！

10月4日　「わき水まつり」第一部わき水イベント

わが会は「そばがき作り」担当で私は朝から終わり近くまで水車を使って粉ひきをやっていて全体を見ることはできなかったのですが、盛況だった様子。夢中になって粉ひきを手伝ってくれた滝直子ちゃん（小2）、志鎌好浩君（小3）（おじいちゃんにたべさせるといって紙コップ一杯のそば粉を持って帰った）ありがとう。

11月22日　山道さんの講演会及び野川写真コンテスト

とてもいい講演会だった。イベント全体を通して「地下水を守る会」の蒲生さん、大木さんの頑張りが大きかったと思う。感謝します。

11月27～28日　第2回炭焼きキャンプ

今回は全員で体験できるようにということで少人数で行ったのだが、少人数すぎて、またどしゃぶりの雨にもたたられて大変だった。ずぶぬれ泥だらけになって一緒にやって下さった講師の広若さん、野中さん達にはただ感謝、感謝！

「消費者まつり」実行委員会参加（2月25、27、28日）

毎年消団連が行ってきた消費展を発展させて「第一回消費者まつり」として環境問題をテーマに行うという呼びかけに応じて参加。サブタイトルの「共に生きるまちをめざして」は、虫や鳥や草花や木々、農地と都市住民、障害者やお年寄りや外国の人達も同じ生命を持った存在として生きて行ける環境ということだと理解しています。そして今環境問題の根源を見すえたとき、工業化社会の経済効率と貨幣価値を絶対の尺度とするあり方が浮かび上がってきます。そこで森と土と水を守ってきた「農」の存在がいかに重要であるかを考え、「農」の持つ多様な価値が現代文明を救うと主張される農大の進士先生をフォーラムの講師に迎えることができたことは喜びとするところです。

「あとがき」

2回にわたる炭焼きに参加してくれた上ノ原小の清水路子ちゃん、その体験を夏休み自由研究で発表したそうですが、お友達が図書館で調べたり、工作したりしたものも大切ですが、いかにも都会人らしいお父さんと泥まみれで真っ黒になって掘り出した炭の感触や炭焼きの臭い、猛烈に吹き上げる煙の色の変化などを直に体験したことが何より貴重だと思います。そしてきっと自然を愛する大人になってくれるでしょう。

（文責依田）